

社会に生きる「街あきんど」

街の原点との出会い

土居 年樹

Written by Toshiki Doi

日本中の商店街の衰退ぶりは目を覆うものがある。なんと全国で97%が衰退しており、繁昌しているのはわずか3%にすぎないという。

私は、先代の跡を継いで50年、街の「茶碗屋」の目を通して、大阪の天神橋筋商店街を見続けてきた。とりわけ昭和50年以降は、商店街の一役員として、その活性化に取り組んできた。そこにはさまざまなドラマがあり、「喜びも悲しみも幾歳月」の人生があった。だが、その中で一貫して持ち続けてきた思いは、「この街が好き」「この街を残したい」ということだった。私は、そのためには、天神橋筋とそこで活動する「街あきんど」の存在が不可欠であると信じている。

今から40年程前、商店街の大晦日は人でごった返していた。そこには客と店主の触れ合いや掛け合いがあり、売り手と買い手が買い物を楽しんでいた。その光景を懐かしいものと感じる人も多いはずだ。しかし、昭和32年、千林商店街に「主婦の店・ダイエー」が出現したのを契機として、徐々に商店街への客足は遠のいていくことになった。

昭和56年に天神橋筋三丁目商店街が、日本で初めて商店街発のカルチャーセンターを開設したのをきっかけに、行政のソフト事業に関する支援が取り入れられ、全国的に「商店街に文化を」という機運が高まってきた。

私は、商店街は「商い文化」以外にも目を向けるべきだと言い続けてきた。その周辺には、芸能・芸術文化、物づくり文化、お祭りなどの伝統文化といった地域文化がきら星のごとく存在しているからだ。あたかも、いろいろな具がそれぞれの味を出し、温もりのあるご飯にまぶされ、地域という「うつわ（街）」に盛られているかのごとくである。この「うつわ」の中が生きてこそ、商店街の価値があると考えている。正にかやくご飯なのだ。

つまり「商店街は周辺の活性化とともに生きる」。これが街の原点でもある。

今、日本中で多くの犯罪が新聞紙上を賑わしている。私は「健全な街が健全な社会を創る」と思っている。「街あきんど」は、まさに街の見張り番であり、街の守り人なのだ。その「街あきんど」を残さない社会を、私は憂えているのである。そのためには、私も含めて「商店街のリーダー」の踏ん張りが大事なことは言うまでもない。



ぜひとも、その「街あきんど」に会いに、多くの人に商店街にきてほしい。そうした思いから、さまざまな試みを行っている。

天神橋筋商店街では、ソフト面では「七夕まつり」の復活、多彩なみやげ物づくり、天満芸能復活祭、琵琶湖の葦を使った紙づくりなどに取り組んできた。一方、ハード面では、鳥居のついたアーケードを設置。また、数年前からは修学旅行生の「一日丁稚体験」も展開している。これは、学生たちに「街あきんど」の世界を体験してもらい、地域と共にある商いの姿を実際に知ってもらうためのものだ。そして今は、全国的に脚光を浴びている上方落語の定席小屋「天満天神繁昌亭」の建設に心血を注いでいる。

平成12年に施行された「街づくり三法」は、必ずしも「中心市街地活性化」に寄与していなかった感がある。私は大阪商工会議所の議員として、昨年、学者や有識者とともに、この法案の見直し論を提言した。それもあってか、最近では国の対応にも変化が現れてきたようだ。「ほんまもんの街づくり」が期待される時代背景を踏まえて、心して取り組んでいただきたいものだ。

土居 年樹（どい・としき）

1937年大阪府生まれ。父親の死去のため同志社大学商学部を中退し、55年（株）丸玉一土居陶器店入社。79年同社代表取締役。94年天神橋筋商店連合会会長、95年北区商店会総連合会会長、98年NPO法人天神天満町街トラスト代表理事などを歴任。早くから天神祭を生かした商店街の観光振興や空き店舗対策に取り組んできたほか、カルチャーセンターの設置や修学旅行生の誘致、ストリートミュージシャンの育成といった独自の活動に取り組んでいる。現在、日本が選んだ観光カリスマ百選に大阪で唯一、選ばれている。

CEL